建築探訪 Part Ⅱ ⑭

本土建築家が描いた 新しい沖縄建築

文・写真／福村俊治

建築家名	建物名称　　竣工年
ヴォーリス	旧那覇バプテスト教会 1916(取壊)
武田五一	旧那覇市役所 1919(取壊)
清村勉	旧大宜味村役場 1925
ＳＯＭ	海軍病院 1953
ＳＯＭ&片岡献	聖クララ教会 1958
ライアン	琉球銀行本店 1964
芦原義信	琉球大学附属病院1972(取壊)
渡辺邦夫	那覇西給油所 1974(取壊)
清家清	海中公園センター黒島研究施設 1975
丸山欣也	今帰仁公民館 1975
渡辺邦夫	ホテルタイラ 1975
仙田満	沖縄県立石川青少年の家 1975(取壊)
槇文彦・木村俊彦	海洋博水族館 1975(取壊)
木村俊彦	海洋博いるかネット 1975(取壊)
菊竹清訓	アクアポリス 1975(取壊)
山下和正	海洋博 三井こども科学館 1975(取壊)
神谷宏治	海洋博 アメリカ館 1975(取壊)
林昌二	海洋博 住友館 1975(取壊)
曽根幸一&谷口吉生	海洋博 国際三号館 1975(取壊)
村田豊	海洋博 芙蓉ｸﾞﾙｰﾌﾟﾊﾟﾋﾞﾘｵﾝ 1975(取壊)
谷口吉郎	沖縄戦没者墓苑 1979
ＺＯＯ(象設計集団)	名護市庁舎 1981
内井昭蔵	浦添図書館 1984　浦添美術館 1989
安藤忠雄	旧フェスティバル 1985
前川国男	石垣市民会館 1986
原　広司	城西小学校　1986
大谷幸夫	沖縄コンベンションセンター 1987
髙橋靖一	浦添市民体育館 1987
黒川紀章	沖縄県庁 1990
鬼頭梓	うるま市立中央図書館 1991
長倉威彦	具志川ランセンター 1999
髙松伸	国立劇場おきなわ 2003
シーラカンス	沖縄アミークス 2011
飯田善彦	沖縄県看護研修センター 2013
手塚貴晴	空の森クリニック 2014

聖クララ協会（1958年、片岡献）
戦後の混乱期に造られたアメリカの現代建築を彷彿とさせる教会建築。メンテナンスがしっかりされ、地域のシンボルとなっている

琉大附属病院（県立那覇病院、1972年、芦原義信）
全面花ブロックの低層棟が通りや公園に対して威圧感を和らげる建物配置となっている

城西小学校（1986年、原広司）
首里城が復元される前に計画・建設された。各教室に赤瓦屋根を載せ、首里城周辺の景観を誘導した

沖縄コンベンションセンター（1987年、大谷幸夫）
多くの人々が集まる施設で、建物周辺も多くの大屋根が影を作る。戦争を体験した設計者が、沖縄戦慰霊の気持ちを込めた作品

名護市庁舎（1981年、象設計集団）
1979年、全国公開コンペで300を超える応募作から選ばれた。沖縄という地域建築のあり方を問うた

ふくむら・しゅんじ　1953年滋賀県生まれ。関西大学建築学科大学院修了後、原広司＋アトリエファイ建築研究所に勤務。1990年空間計画VOYAGER、1997年teamDREAM設立。沖縄県平和祈念資料館、沖縄県総合福祉センター、那覇市役所銘苅庁舎のほか、個人住宅などを手掛ける

かつて建物や街の景観はその土地の気候風土に合わせて、先人が長年かかって作ってきたものだった。石材が取れるところは石造り、森林の多いところは木造のようにその土地で手に入る建築資材や職人技術で気候風土にあった建物が作られ、周囲の自然風景の中で集落や街の景観が作られてきた。南北に長く多様な気候風土の日本の各地には個性のあるさまざまな「民家や景観」があった。

しかし戦後、建物や都市は経済性と機能性のみが重視され、建設・設備技術の進歩によって気候風土など環境までコントロールできるような時代になって、貴重な自然環境を壊しながら均質化した箱のような味気ない住宅や建物ばかりが並ぶ都市が増えていった。そんな経済優先時代、本土には多くの良識ある建築家が悶々（もんもん）としていた。

一方、本土の高度経済成長に比べ開発や都市化が遅れていた沖縄に招かれたその本土の建築家にとって、島しょ・亜熱帯気候地域に位置し、年中温暖で自然の豊かさが残る魅力的な沖縄の気候風土の中で建築を作るのは、本土ではあり得ない設計のチャンスであった。新しい沖縄建築の創造意欲をかき立てられた。そして地元の建築家よりも「新しい沖縄建築作り」の挑戦が続き、小さな沖縄の中に数多くの力作が生まれた。これは他府県では見られない現象だ。

「らしさ」模索する工夫

本土の建築家が新しい沖縄建築を模索したこれらの建物を見ると、共通するところが見える。内部と外部が連続するような開放的な平面計画、影を作る屋根やピロティ、風が通り抜けるコンクリート花ブロック、赤瓦屋根、プレストレストコンクリートなどの沖縄らしさを模索するいろいろな建築的工夫がされ、一時期沖縄は日本の現代建築の宝庫であった。しかし、これらの建物の半分ほどがすでに取り壊されてしまい、これらの模索が地元の建築家に継承されているだろうか。現在の沖縄は本土とほぼ同じ建物や街になっているような気がしてならない。気候風土を生かした沖縄らしい建物や景観を作りたい。

＝毎月第2週に掲載